

東京大会の環境レガシー

研究員 磯部孝行, 松浦廣樹
高橋和枝



第32回オリンピック競技大会およびパラリンピック競技大会（以下、東京大会）が感染症拡大による緊急事態宣言下で2021年に開催されました。本研究チームでは開催前から、関係設備の建設による環境負荷、観客・大会関係者の移動による大気汚染や廃棄物の増加、暑さ対策によるCO₂排出量の変化等、東京大会によるさまざまな環境への影響を現地で調査してきました。

特に東京大会の前後で国民の環境意識の変化と、大会後に残すべき環境レガシーについて検討するため、一般消費者へアンケート調査を行いました。アンケートは、商用インターネットアンケートサービス（NTTコムオンライン・マーケティングソリューション提供）を用いて実施し、約200人から有効回答を得ました。主な結果を右図に示します。

組織委員会の報告書¹⁾には大会をきっかけとして国民の環境意識改革が進んだと記載されていますが、本アンケートの結果からは、例えば小型家電リサイクルの認知度が大会前後であまり変化していないことが

わかりました（図1）。その一方で、大会の環境レガシーとして残すべきものとして都市緑化やゴミのポイ捨て削減などが重要視されていることもわかりました（図2）。

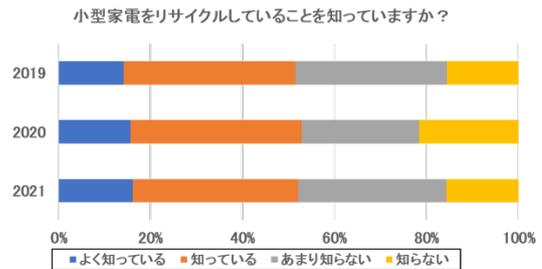


図1 小型家電リサイクルの認知度

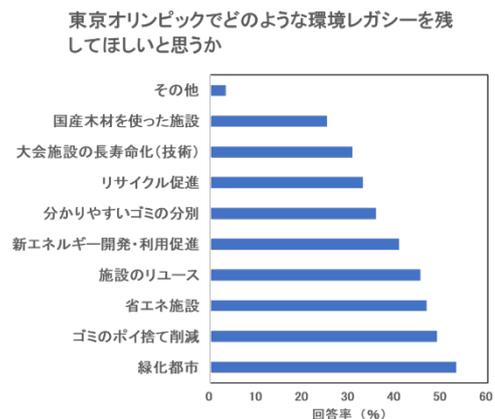


図2 残したい環境レガシー

環境配慮行動を促す意識の醸成には「継続」が重要であると考えており、今後も人も環境もしあわせにする研究を継続していきたいと考えています。

1) 東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会：Sustainability Post-Games Report 持続可能性大会後報告書、(2020), 160pp